

アウグスティヌスの「人間」理解について —『キリスト教の教え』序章を中心に—

菊 地 伸 二

はじめに

キリスト教において人間はどのような存在として捉えられているのであろうか。このことを扱う分野は、いわゆる「キリスト教人間学」と言われているが、そのアプローチの仕方は必ずしも一様であるわけではない。

本論においても、「キリスト教人間学」に属することがらを扱おうと考えているが、ここでは、古のキリスト教思想家がこの問題をどのように捉えようとしていたかということを通じて、このことを検討してみることにしたい。

より具体的に言うならば、4世紀から5世紀にかけて北アフリカのヒッポの司教として活躍したアウグスティヌスにとって、人間とはどのような存在として考えられていたのであろうか。

しかしこのような問い自体が、アウグスティヌスを少し知っている人であれば、非常に雑駁な問いと映るかもしれない。というのも、アウグスティヌスという人こそは、その数多くの著作の中で、人間とはどのような存在であるかということを絶えず問い続けたとも言えるからである。

そこでここでは、アウグスティヌスが『キリスト教の教え』という著作において、人間という存在をどのようなものとして捉えようとしたかということに限定して検討してみることにしたい。

以下の記述は、およそ次のような順で進めていくことにしたい。

『キリスト教の教え』という著作

『キリスト教の教え』序章と三種類の批判者たち

三番目の批判者の問題点

アウグスティヌスの人間理解

おわりに

『キリスト教の教え』という著作

それでは、『キリスト教の教え』とはどのような著作であるか。日本語で一般に『キリスト教の教え』と訳されるこの本の原題は、*De doctrina christiana* である。ラテン語の *doctrina* は、英語では *doctrine* となるので、今日的には、「教理」という日本語訳も可能であろうが、その内容に照らし合わせてみる限り、教会の教理を解説したようなものではないので、ここでは、より幅広く捉えて「教え」という訳を採用することにしたい。

アウグスティヌスの時代は、ローマ帝国においては、すでにキリスト教が国教となった時代ではあったが、依然として、古代からの異教の文化も強く影響を与え続けており、そのような中であって、アウグスティヌスは、キリスト教の教え、とくに、聖書の教えをどのように伝えていくか、ということに精神を傾注していたと考えられる。ことに、この著作を手掛けようとした時期は、アウグスティヌスが北アフリカの司教に叙任された直後でもあり、教会における立場としても、聖書をどのように伝えていくか、ということが喫緊の課題であったということは十分に考えられることである。

さて、それでは、『キリスト教の教え』の構成はどのようなになっているのであろうか。この作品は序章と四つの巻から成り立っている。

執筆に関しては、その着手から完成に至るまで、じつに 30 年ほどの歳月が流れている。最初からそのように長期にわたって執筆しようとしたわけではないようであるが、そのことについては、『再考録』(II,4,1)において、次のように記されている。

『キリスト教の教え』についての書物が未完成であったのに気づいたとき、これをそのままに放置して、他の書物の再考に移ることより、これを仕上げることを好ましく思った。そこでわたしは第 3 巻まで仕上げたが、「それを隠して三斗の粉にまぜると全体がふくれた」女について福音書の証言が述べられている例の箇所まですでに書き終えてあった。最後の巻も加えて、この著作を四巻で完成させた⁽¹⁾。

ところで、本書の全体の構成については、第 1 巻の最初のところ (I,1,1) で次のように書かれている。

すべての聖書解釈は二つの方法にもとづいている。それは理解されなければならないことを見出す方法と、理解されたことを表現する方法である。まず理解の方法について論じ、そのあとで表現の方法について論じよう。

こうして、四つの巻のうち、最初の三巻は、理解されなければならないことを見出す方法について扱われ、最後の一巻は、理解されたことを表現する方法が扱われることになる。

このように、『キリスト教の教え』という著作は、非常に大きく言うならば、聖書をどのように理解し、また、それをどのように伝えるか、ということを経験したものであると言えることができるであろう。

ところで、本論では、『キリスト教の教え』という著作において、人間という存在をどのようなものとして捉えようとしたかということを検討すると述べたが、果たして、聖書をどのように理解し、また、それをどのように伝えていくか、ということを経験している著作において、そのようなことを明らかにすることは可能なのであろうか。

ところで、この著作には、四巻の本文の前に序章が置かれており、そこには、この作品の執筆の目的が記されている。そこで次に、序章に注目することにしたい。

『キリスト教の教え』序章と三種類の批判者たち

『キリスト教の教え』の序章は次のような文章で始まっている。

聖書を解釈するためのある種の規則がある。これを、聖書を学ぶ方々に伝えることはあなたがち無意義なことではあるまい。それは単に聖書の不明瞭な箇所を明らかにした他の註解書を書いたものを読むだけでなく、みずからも明らかにすることによって益を得ることができるようになるためである（序, 1）。

聖書を解釈するための規則を学ぶことによって、みずから聖書を学ぼうとしている人びとを対象にこの作品は書かれていると、まずは理解することが可能である。ところで、そのようなことを最初に述べながら、アウグスティヌスは、この作品を書くにあたって、是非とも一言言っておかなければならない人があることを記している。そしてそれはかれによれば、三種類の人がいることを述べている。以下、引用を通してそのことを確認しておきたい。

たしかにわれわれが規則として述べることを理解できなかった場合、ある人びとは、われわれのこの著作に対して批判を加えるであろう。ところがある人びとは、規則は理解でき、それを適用しようと思い、この規則に従って聖書を解釈しようと努めてみるものの、かれらが望むことを解明し説明することができなかったときに、わたしのこの努力は空しかったと思うことであろう。というのは、かれらとしてはこの著作がすこしも助けにならなかったで、こんなものはすこしも役立つはずはないと思ひこむからである。

三番目の部類の批判者もいる。この人びとは聖書をじっさい正しく解釈するか、正し

く解釈したつもりになっている。この人びとはわたしがここで伝達することを決意したような規則などすこしも読まなくても、聖書を解き明かす能力を備えていることに気づいているか、そう思いこんでいる。そこでこんな規則など誰にも必要でない、いやむしろ聖書のあの不明瞭な箇所について、舌を巻くばかりの仕方であらかにされるすべてのことは、天与の賜物によって起こり得るのだと、大声で宣言するであろう(序, 2)。

批判する人びとのうち、一番目と二番目の批判者に対しては、ひとつのたとえによって答えようとしている。一番目の人は、上弦の月とか、下弦の月とか、かすかにしか見えない星をみたいと思っていて、わたしが指を伸ばしてそれを指し示そうとするが、そのわたしの指を見るだけの十分な視力をさえ具えていない状態に似ている、と述べている。それに対して、二番目の人は、わたしの指は見えるけれども、指差して示している星は見えないと思っている状態に似ている、と述べている⁽²⁾。

これに対して、三番目の人については、神の賜物を誇り、今や伝達しようと決意したこれらの規則を知らなくても、聖書を理解し、解釈することができると得意に思うあまり、わたしが余計なことを書こうと願っていると思う人びとの高慢にも昂ぶった気持ちを鎮めてやらなければならない、と述べている⁽³⁾。

ここで述べられている三種類の人は、たしかに、アウグスティヌスが提唱しようとしている規則が有益でないとする点では共通している。

しかし、一番目の人と二番目の人は、その規則そのものが理解できないか、あるいは、その規則をしかるべき仕方では適用できないか、という理由から、無益であるとしているのに対して、三番目の人は、そもそも、そのような規則そのものが不要であるとする点で無益であるとしている点で大きく異なっている。

アウグスティヌスが、『キリスト教の教え』を執筆するにあたって、とくに、この序章で問題にしているのは、この三番目の人であることは確かであろう。

「われわれが問題にしているのは、自分たちは人を手引きとしなくても、聖書を理解できると言っているキリスト教徒である」(序, 5)と言われているとおりである。

それでは、この三番目の人は、アウグスティヌスにとっては、どのような意味で問題であるのだろうか。一番目の人や二番目の人と較べて、この三番目の人は、とりわけ、アウグスティヌスの人間理解という観点からすると、どのような点で問題であると言えるのだろうか。このことを次に検討してみることにしたい。

三番目の批判者の問題点

三番目の批判者に対して、アウグスティヌスはどのような点を問題にしているのだろうか。

三番目の批判者に対しては、次のようにも言われている。

ところで神の賜物を誇り、今や伝達しようと決意したこれらの規則を知らなくても、聖書を理解し、解釈することができると得意に思うあまり、わたしが余計なことを書くように願っていると思う人びとの高慢にも昂ぶった気持ちを鎮めてやらなければならない（序, 4）。

アウグスティヌスは三番目の批判者を高慢であるとも昂ぶっているとも表現している。どうして高慢なのであろうか、どうして昂ぶっているのであろうか。

先ほど引用した「自分たちは人を手引きとしなくても、聖書を理解できるという」と言われていることと結びついているのであろうか。

アウグスティヌスは三番目の批判者に対して回答しようとして、取り上げる最初の人物はアントニウスである。エジプトの修道士であったかれは、文字の知識などすこしもたずに、耳から聞いただけで聖書を記憶し、賢く思い巡らすことによって、理解したと伝えられている。さらに、異邦人のキリスト教徒であった例の奴隷を引き合いに出す。この人物もまた、だれからも学ばないのに、アルファベットが自分に啓示されるように祈ることによってそれに完全に通曉するに至り…人から差し出された聖書を、…よどみなく読んだと伝えられている⁽⁴⁾。

アウグスティヌスは、たしかに一方でこのような人物がいることを否定してはいない。しかし、三番目の批判者に対しては、むしろ、その反対のことを強調しようとしている。

神の大いなる賜物をいただければ人から学ぶ必要はないとするかれらに対して、アウグスティヌスは、「アルファベットは人びとを通して学んだことを想起してほしい」（序, 4）と述べる。また、次のようにも述べる。すなわち、「われわれはごく幼いころから、耳から聞く習慣によって自国の言語を学んだが、ある外国語を、つまり、ギリシア語やヘブライ語、その他の言語を、自国語であるラテン語と同じように、耳から聞くことによって、あるいは教師という人間を通して受け取ったのだということを認めてほしい」（序, 5）と。

それでは、三番目の批判者の問題点とは何なのか。

それは、アウグスティヌスの次の言葉、すなわち、「むしろ積極的に人を通して学ぶべきである。このことを傲慢におちいることなしに学んでほしい。また、他の人に教える者

は傲慢でなく、また、羨望なしに、受け取ったことを伝達すべきである」(序, 5) という言葉にもみられるのではないだろうか。

すなわち、三番目の批判者の問題点とは、人が人から学んでいくこと、また、自らが受けたことを謙虚に受けとめて、それを他者に伝えていくこと、こうしたことを、はなはだ軽視しているということなのである。

以下、アウグスティヌスは、聖書の中から、幾つかの例を取り上げて、人が人から学ぶことの重要性を示していくことになる。

一番目にあげるのは、使徒パウロの例である。次のように言われている。

神的な天の声にうち倒され、教えられた使徒パウロですら、人のところに遣わされたのである。それはサクラメントを授けられ、教会に繋がれるためであった (序, 6)。

二番目にあげるのは、百卒長コルネリオの例である。すなわち、次のように言われている。

百卒長のコルネリオはかれのさまざまな祈りが聞かれ、その施しが目にとまると天使がかれに告げたにもかかわらず、ペテロのもとに教えを受けるために遣わされた。それはペテロからたんにサクラメントを受けるだけでなく、なにを信すべきか、なにを望むべきか、なにを愛すべきかを聞くためであった (序, 6)。

三番目にあげるのは、宦官とピリポの例である。次のように言われている。

例の宦官が預言者イザヤの書を読んでみたもののよく判らなかったとき、天使がかれを使徒のもとに派遣したわけでもないし、宦官がわからなかったところを天使に解いてもらったわけでもない。あるいは人間の役目を素通りして、神によってたましいに啓示されたわけでもない。それどころかピリポが神の靈感を受けて宦官のもとにつかわされ、そのかたわらにすわったのである。ピリポは預言者イザヤの書をよく弁えていて、宦官に人間のことばづかいと舌でもって、聖書の中で隠されていてわからなかったところを明らかにした (序, 7)。

さらに四番目にあげられるのは、モーセの例である。次のように言われている。

神はモーセと話されたけれども、モーセは大きな見識をもちつつも傲慢にならずに、かくも大きな民の統治と管理についての忠告を異邦人であるかれの舅から受け取ったのではなかったか (序, 7)。

以上、四つの具体例を述べたが、これらに共通していることは、使徒パウロにしても、百卒長コルネリオにしても、宦官にしても、モーセにしても、神または天使といった神的存在と直接的に関わる可能性を有していたにもかかわらず、そのような選択をせずに、人

間と直接に関わるという道を選択し、その人間から学び、教えを乞うているということである。

では、アウグスティヌスはこのような聖書からの引用をしながら、どうして人間が人間から学ぶことの重要性を主張しようとしているのであろうか。

ここには、アウグスティヌスの人間という存在についての考えが示されているのではないだろうか。

そこで次にそのことを見ることにしよう。

アウグスティヌスの人間理解

先に取り上げた二番目の百卒長コルネリオの例の続きに、次のように言われている。少し長いが、アウグスティヌスの人間理解を知る上では重要な箇所であると思われるので、ラテン語の原文も加えて引用することにしよう。

たしかになにごとも天使によって遂行されることができたはずである。けれども、もしも神が人びとを通して人びとに神のこばを与えようと望んでおられないように見えるとしたら、人間の尊厳は軽んじられることになる。もしも神が人間という神殿を通して応答を発し給うことがなく、学習させるために人びとに神が伝達しようと望まれることを、天上から、しかも天使を通して、嘲哂と響かされるとしたら、「あなたがたはたしかに聖なる神の宮である」（「コリントの信徒への手紙一」3, 16）と言われていることはいったい本当と言えたであらうか。もしも人びとが人びとを通して学習するのでなければ、人びとをたがいに一致のきずなで結び合わせる愛が、魂をたがいに貫流し、混合させるためのはいりぐちをもたないことになるであらう（序, 6）。

Et poterant utique omnia per angelum fieri, sed abiecta esset humana condicio si per homines hominibus Deus verbum suum ministrare nolle videretur. Quomodo enim verum esset quod dictum est: *Templum enim Dei sanctum est, quod estis vos* ; si Deus de humano templo responsa non redderet et totum quod discendum hominibus tradi vellet, de caelo atque per angelos personaret? Deinde ipsa caritas, quae sibi homines invicem nodo unitatis astringit, non haberet aditum refundendorum et quasi miscendorum sibimet animorum, si homines per homines nihil discerent.

ここで問題となっているのは、神が自らの言葉をどのようにして人間に伝えようとして

いるか、ということである。そのためには、もちろん、天使を通して人間に伝えるという仕方があることをアウグスティヌスは否定しているわけではない。しかし、その仕方が唯一の方法であるとした場合、人間が人間に伝えるということは無視されることになってしまう。そして、それは、人間の尊厳が軽視されることになるのである。ここに、人間の尊厳と訳された言葉であるが、ラテン語原文に遡るならば、humana condicio となっており、人間の状況、人間の境遇、人間の条件等と訳すことが可能である。condicio という語は、地位、位置づけ、境遇、状況といった意味である。

ちなみに、ある英語訳テキスト⁽⁵⁾では、our human status となっており、わたしたち人間の置かれた地位と訳すことが可能である。

神の言葉が、常に、天使という存在を媒介として、人間に伝わるということになるのであれば、人間という存在の地位や境遇が貶められることになるのではないであろうか、とアウグスティヌスは考えているのである。

ここでの力点は、神の言葉を人間が人間に伝えることの重要性にあることは言うまでもないことである。しかも、それこそが人間が人間であるというその在り方の本質に関わるということなのである。

神の言葉を人間が人間に伝えることのイメージは、アウグスティヌスにおいては、聖書に「あなたがたは聖なる神の神殿である」と記されているように、「神殿」によって示されている。

一人ひとりの人間は、その人間のうちに神の言葉を聞くことができる、いわば、神の「神殿」なのである。このことは、その人間のうちに、神の言葉を聞くことのできる場がある、ということの意味している。また、その人間のうちに、他のある人間が、神の言葉を聞くために、赴いていくような場がある、ということをも意味している。アウグスティヌスが、一人ひとりの人間を、神殿と位置づけていることは興味深いことである。もちろん、もともとは聖書に由来する言葉ではあるが、神殿とは、ある空間的な広がりを持った場所であるし、人びとがお互いに集まる場所でもあるし、人びとが神の言葉を、人びとを通して聞くことのできる場所でもあるからである。

神が人間という神殿から応答を発する、という表現は、まさしくこうしたことを示していると考えられる。

使徒パウロの場合も、百卒長コルネリオの場合も、宦官の場合も、モーセの場合も、神の言葉が聞くことのできる人間という神殿のところに赴いたのである。

それでは、人びとが人びとに伝えること、あるいは、人びとが人びとから学ぶこと、にはどのような意味があるのでしょうか。それについては、先の引用で次のように言われている。

もしも人びとが人びとを通して学習するのでなければ、人びとをたがいに一致のきずなで結び合わせる愛が、魂をたがいに貫流し、混合させるためのはいりぐちをもたないことになるであろう。

すなわち、人びとが人びとを通して学ぶこと、あるいは、人びとが人びとに伝えることによって、人びとを互いに一致のきずなで結び合わせる愛が、魂から魂に流れ出し、混ざり合っていくための入り口となっていくと、アウグスティヌスは述べるのである。

人びとが人びとから学ぶ場合でも、人びとが人びとに伝える場合でも、そこで重要な役割を果たしているのは「言葉」である。アウグスティヌスは、ここで、人間の発する「言葉」が關いていく愛について触れている、あるいは、人間が「言葉」を聞くことによって生まれる愛について述べている、このように言ってもよいのではないだろうか。

聖書において、人びとが人びとから学ぶ四つの例が先に挙げられたが、もう一度確認しておきたい。

使徒パウロが人のところに遣わされたのは、「 sacrament を授けられ、教会に繋がるためであった」と記されている。 sacrament を受けるということは言葉と行為を通して、教会共同体という、いわば愛で結ばれている共同体の一員となることであり、パウロは正しくその道を選択したのである。

百卒長コルネリオがペテロのところに赴いたのは、「たんに sacrament を受けるだけでなく、なにを信すべきか、なにを望むべきか、なにを愛すべきかを聞くためであった」と記されている。コルネリオは、 sacrament を受けることによって、言葉と行為を通して愛の共同体の一員となるだけでなく、信仰・希望・愛についてのキリスト教的な理解を知ることによって、かれのうちには、共同体に対する正しい理解が生まれることになっていくのである。

宦官においては、むしろそこにピリポが赴き、そのかたわらにすわりながら、人間のことばづかいと舌でもって、聖書の言葉の隠れた意味を明らかにしたことが記されており、かたわらにすわるという行為にも示される愛に裏打ちされた言葉を通して、宦官は教会の交わりのうちに招かれていくことになったのである。

モーセの場合にも、異邦人の舅から忠告を受けるという形で、しかるべき言葉をかけら

れていることがうかがい知れるのである。

総じて、これらの四つの例は、言葉を聞くということ、また、その言葉を聞くことを通して聞かれていく愛について触れられていると言ってよいであろう。

おわりに

序章の最終節には、次のような言葉が見出される。

だからわれわれが伝えようとしている規則を受け取った人は、たまたま聖書の中で不明な箇所にてあったとき、若干の規則をいわば文字と同じように習得しているから、分からないところを分かせてくれる自分以外の解釈者を必要としない（序, 9）。

この言葉に示されるように、人間は他の人から聖書の言葉を聞くとき、また、その意味するところについて説明を受けるときであっても、何か、天からいきなり光のようなものを受けてたちまちに理解するというのではなく、言葉を受けた人の理解力に即して理解するのである、ということがここで示されている。

人間がこのような理解の道を辿る存在であるからこそ、アウグスティヌスは、このような著作を手がけることにもなるのである。

このように、言葉が人間から人間へと伝達され、理解されていくことを通して、言葉は、その両者のあいだで共有されることにより、愛が生じていくところに、まさしく、人間の人間たる所以があるのであり、そのような言葉を通して愛が深まっていくというところに人間存在の独自性が見出されるのである。

註

- (1) 日本語訳については、『アウグスティヌス著作集 6 キリスト教の教え』（加藤武訳、1988 年、教文館）を用いた。
- (2) 『キリスト教の教え』序, 3。
- (3) 『キリスト教の教え』序, 4。
- (4) 同上。
- (5) The Works of Saint Augustine, A Translation for the 21th Century, *Teaching Christianity* (New City Press, 1996) による。

Augustine on Human Being in *De doctirna christiana*, prooemium

Kikuchi, Shinji*

本論文では、キリスト教における人間理解を、4世紀の教父であるアウグスティヌスの『キリスト教の教え』序章を中心に考察する。

『キリスト教の教え』は、聖書をどのように解釈し、どのようにそれを伝えるか、ということを扱った著作であるが、その序章において、聖書の言葉を人間が人間に伝えていくことの重要性が指摘されている。

言葉が人間から人間へと伝達され、理解されていくことを通して、言葉は、その両者のあいだで共有されることにより、愛が生じていくのであるが、まさしくそこにこそ、人間の人間たる所以があるのであり、そのような言葉を通して愛が深まっていくというところに人間存在の独自性が見出されるのである。

キーワード：人間，言葉，愛，キリスト教人間学

*Nagoya Ryujo Junior College

